

写真表現による支持媒体とその加工および展示実験についての包括的研究

大阪芸術大学 写真学科 教授 吉川 直哉

本研究である「写真表現による支持媒体とその加工および展示実験についての包括的研究」は、令和2年度に塚本学院教育研究補助費として採択され、取り掛かる予定だったが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴う緊急事態宣言等の発令など社会活動の制約によって進めることが困難となり、令和3年度に繰越願いを申請し、塚本学院のご配慮によって令和3年度塚本学院教育研究補助費に繰越することとなったものである。

本研究の概要は、写真媒体である紙を他の媒体との融合による加工作業を経て、作品展示にどのような可能性が見出され、課題や問題点が発見できるかという点に絞られる。さらに、長期にわたり国内外の作品を取り扱う美術館やギャラリーにおける有識者や研究者の助言を受けることもその一つであった。ところが新型コロナウイルス感染症の感染拡大は、多少の波があったにせよ社会活動の制約を余儀なくされ、美術館等に於いても通常業務以上の負担が多く、実際に面談することは実現できなかった。以上のような原因から、研究途上ではあるが、本研究の研究を年度末に打ち切り、誠に不本意ながら途中経過としての実績報告を以下に申し上げる。

年度内の研究実績として以下の作品制作と展示を実行した。写真は通常は紙媒体を支持体とするが、その平面性や視覚的な表現効果のために透明なアクリル板(Plexiglas)に特殊溶剤を用いて圧着することがある。これは現代写真の系譜の中では、ドイツのクンストアカデミーアユッセルドルフ(Kunstakademie Düsseldorf)で写真学科長として教鞭をとっていた Bernd Becher の影響を受けたバツィヤ・シューレの写真家たちが積極的に表現手段として取り入れていることで有名である。ところが、そのアクリル板そのものの耐久性には各国の美術館などから疑問も生まれている。それに限らず、現代美術における素材の脆弱性や汎用性についての問題は、世界各国の芸術家、研究者などが注目する現代における共通の大きな課題である。

本研究では、実際にどのような脆弱性が存在するのか、その問題点を見出すために作品制作とその展示を通して具体的に発見しようとするところから始めた。幸い一つのプロジェクトに出会うことができ、アクリル板による作品制作を試みた。写真のイメージそのものは、顔料系デジタル・インクジェット・プリントを使用して、透明アクリル板によるアクリル・ダイフィット加工を専門業者モリヤ大阪へ依頼した。同社はこの分野では長い経験と実績があり、信頼できるとして耐久性について問うた。同社の返答は実験データが

なく、野外展示は保証ができないということだった。

よって、あらためて野外展示による耐久性実験を行うことになった。実験の場は、「じないまちフォトプロジェクト」の一貫で行うことにした。同プロジェクトは、富田林市の寺内町にある旧杉山家住宅(国の重要文化財)を含む4カ所(じないまち交流会館、寺内町センター、寺内町展望広場、旧杉山家住宅)で、旧杉山家住宅などを撮影した写真作品をそれぞれの会場で同時開催するというもので、指定管理者の株式会社アスウェルから提案されたものである。本学の大学院生と学部生の有志15名が参加出品したが、私の本研究としては、旧杉山家住宅の庭を撮影することにした「S家の庭」という作品シリーズを制作した。撮影機材は、株式会社リコー・ペンタックスから無償借用した高画質デジタル中判カメラ645Zを用い、現像処理を行なった画像データを大判プリンターEPSON SCP20050Xを使用してデジタルインクジェットプリントに印刷し、モリヤ大阪にアクリル・ダイフィット加工を依頼した。同社からは野外提示を推奨されなかったこともあり、本来は表面のみのアクリル加工を裏面にも施し、しかも通常の最大の厚み5mmのアクリル板を表裏両方に接着するよう依頼した。

完成した同作品は、2021年11月6日から11月28日まで展示し、搬入設営と搬出撤去の日程を含めると、31日間、約740時間余り野外に設置した。31日間の日中の最高気温は、約21℃、夜間の最低気温は約4.6℃(無人観測所データによる)で、そのうち雨天は3日間である。

展示作品はシリーズ作品22作品のうち9点。いずれも完全な野外展示とした。またアルミや木製フレームを使用せず、加工されたアクリル板そのものを地面に設置して展示した。なお、同作品は全く同じ条件で制作したものを2セット制作し、その一つを野外展示して、まずは目視による比較を行なった。目視では色調の劣化は見られなかったが、5mm厚のアクリル板2枚が接着された間に挟まれたプリントの周辺がやや劣化しているものが9点のうち半分ほどに見つかった。おそらく太陽光による紫外線ではなく、雨の水分が浸透したことによる変化だと推測できるが、それ以上の検証は前掲の問題があり追及できなかった。新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴う事態が続く、計画通りの実験を行い、専門家との意見交換の場を設けることができなかったが、この研究は非常に重要な課題を含んでおり今後も継続したい。

研究半ばながら以上を報告としたい。